

震災後の子どもたち (23)

子どもが子どもを育てる

森末 哲朗

五月十六日（金） よう子

「おかあさん」

わたしのおかあさん、どうしてるのかな。

おかあさん、どこにいるのかな。

わたしはそんなことわかんない。

ときどきおかあさんにでんわをしてるけど

さびしいな。

ときどきわたしは、さびしくてさびしくて

ないちゃうときがある。

いつも、いつもさびしい。

おかあさんはげん気にしてほしい。

ああさびしいな。

草の表面に丸まっていた水滴がポロリとこぼれ落ちるように、日記の中からよう子の呟きが聴こえてきた。二年生になったばかりのよう子の両親は、半年ほど前に別れて暮らすことになった。よう子と、彼女の二つ違いの弟は、父とその両親と一緒に生活している。

男手ひとつで、保育所通いをしている息子と、小学一年生の娘。よう子を育てることは無理と判断し、よう子の父は彼の両親に同居生活を求めた。

よう子にとつてのおじいちゃんとおばあちゃん、それに父と弟との五人家族が、突然にスタートしたのだ。幼いながらも、父の苦勞が見えるだけに、「この生活に順応しなくては」と、気が張っていたことだろう。でも、やはり、母が恋しい。そんな想いが日記の中に溢れている。

学校では何か言われると嫌だから、両親の離婚のことについては、一人二人の友だちを除いては誰にも話していないと言うよう子。

ところがこの日記の中では、ありのままの心を裸にして曝けている。どんぐりクラブでの日記は、「日記活動」のような性格を持っていて、互いを知り合うためのオープンな日記なのだ。これはと思う日記に出会ったら、翌日ばくが皆の前で読む。よう子もそのことを承知で、この日の日記を書いたのだ。

仲間への信頼が無ければ、到底できないことだ。

翌土曜日は行事があったので、日記の時間はとれず、月曜日になってよう子の日記を紹介した。自分の悲しみを伝えたくて書いた日記でもあるので、ぼくが声を出して読んでいる間、よう子は少し嬉しうだった。いくつかの日記の中には、笑いを誘うものもあったが、よう子の日記の時には水をうったように静かだったことを覚えている。

よう子はこの日もまた母のことを書いた。

五月十九日(月)      よう子

あああ、みんなはいいな。

おかあさんがいいいな。

わたしのうちもいてほしいな。

あああ、いいな、いいな、いいな。

よう子は自分のことだけで頭がいっぱいだったのだらう。

六年生のけいすけは、一年生の夏に、母を病気で亡くしている。

五年生のまさひろは、二年生の終わりに両親の離婚を経験し、いまは母と暮らしている。

本当は「みんなはいいな」ではないのだ。

よう子のさびしさを深く深く理解できる仲間が、とても身近なところにいるのだ。

「誰がよう子の気持ちに伝えてやってくれるだろう？」そんな思いで月曜日に書かれた日記を一冊一冊手にとった。

「誰もいなかったらどうしよう？」そんな不安が全く無かった訳ではないが、やはりちゃんとした。け

いすけだった。

五月十九日(月) けいすけ

「いまどこに」

いまどこにおるんやろな、おれのお母さん。

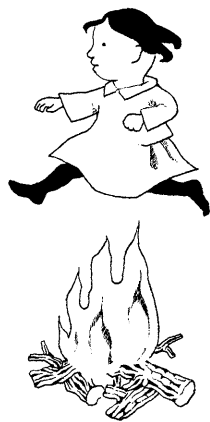
電話かけたいけど電話番号わからへん。

あー本まにどこにおるんやろか。

いまもあのことが本気に思えへん、思った

くない。

いまは明るく生きるだけや。



少し照れ屋のけいすけだが、心の熱さが彼を沈黙させなかった。当然彼にだって、触れられたくないこと触れたくないことはあるだろうが、重かつたであろう心の扉を開いて亡くした母のことに触れていた。

自分一人が寂しさの海で漂流していた気でした。よう子は、「そーや、けいちゃんもそーやつたんや!」と、思い直すことができた。

この日のよう子は、次のような日記を書いた。

五月二〇日(火) よう子

けいすけくん、かわいそうだな。

わたしのおかあさんのこえならきけるけど、けいすけくんのおかあさんはしんでいるから、こえもはなせないなんてかわいそう。

わたしよりも、けいすけくんのほうが、かわいそうだな。

でも、マーくんのおとうさんはどうしてる

かな。

わたしはそんなことはわかんないな。

でもわたしだけじゃなくて、マーくんやけいすけくんもかわいそう。

よう子はとても大切なことを発見した。

わたしだけじゃない、ということ。

普段、何気なく喋ったり遊んだりしているけいすけが、「わたしよりも」大きな悲しみを隠し持っていたことに気がつき、目が醒めた。

よう子の心の動きを、十分な手応えをもって見定めたいけいすけは、更によう子に熱い球を投げ返した。

五月二〇日(火) けいすけ

「よう子へ」

おれとよう子は同じような気持ちやろうけど、「いいな」というのは9/10あつとって、

1/10 まちがつとうかもわからへん。

オレが思うにはお母さんおらんお母さんおらんってかなしんだり、た人をええなと思つとつたってなんもできん。

かなしいなかなしいなつてへこたれとつてもあかん。

かなしいな、でもがんばらなと思わなあかん。

思つとうだけじゃあかん。

自分でけつしんしなあかん。

さいわいよう子はええかおしてるけど、心はずたずたやろうと思つ。

それで1/10というのは、9/10かなしまなあかんけど、1/10げんきだしてがんばろうと思わなあかん。

そうせな、いつまでたつたつて、「かなしいな」というぬまにはまったまやつたらあかん。

1/10のげんきをだして、自分の進む道をすすまなあかんで。

重い扉を開いたけいすけの翌日の日記は、まるでエンジンを全開にしたような激しさと同時に優しさが溢れていた。

今度はよう子が、けいすけの投げた球をしつかりと受けとめた。

五月二十一日(水) よう子

わたしのいえは2回だてでもおかあさんがいない。

いえがおおきいよりおかあさんがいないほうがいやだ。

だけどわたしはげんき。

でも心はたのしいこととおかあさんのことだけだ。

でもがんばらないとだめだなおもう。

だつてがんばらなかつたら、ずうつとずうつとかなしむとおもう。

わたしはがんばるぞ。

心はたのしいことをいっぱいにして、おかあさんのことはちよつとだけにしておこう。

これからは、がんばるぞ、ファイトだ。

たった一週間にも満たないが、暑い時間が流れた。バトルと言つてもいい。二人は力いっぱい直球を投げ合つた。そして見事にけいすけはよう子を立ち直らせてしまつた。

ただでさえ短い放課後の中で、鉛筆を握りしめる時間が負担だつた子もいた筈だ。外でもつと遊びたいな、と思つた子もいただろう。

でも誰一人として「エーッ、今日も日記すんのオ」と、いやそうな声をだす子はいなかつた。

よう子にとつて、けいすけからの剛速球の返球が、どれほど大きな励ましになつたか測り知れない

が、他の皆んなが自分の方を向いてくれたということも、彼女にとつては嬉しい贈り物だつたに違いない。

連続した毎日を、一年生から六年生までの異年齢の群れの中で過ごすことの良さを、ぼくはあることに語つてはいるが、よう子の心の流れを見つめ合つたこの熱い一週間のことを忘れることはできない。

誤解が生まれないために付け加えるが、毎日がこんななうるわしさに包まれている訳ではない。実に他愛もないことで言い争つたり、張り合つたり、ウソをついたり、子どもの百面相は実に奥が深い。

でも、子ども自身が最良の「教育者」であることも確かなのだ。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ)